

ある NGO ワーカーの見たバングラデシュの「災害」

——サイフルの「語り」から（その1）——

高 田 峰 夫

（受付 2008 年 10 月 31 日）

は じ め に

近年、様々な面で「災害」に関心が高まっている。そうした中で、これまで災害対応や防災の視点で語られる傾向が強かった災害研究も裾野を広げ、被災者の視点等に目配りするような研究も登場している。世界的に見ても、スマトラ沖地震とその後の大津波災害を契機として、同様の傾向が顕著なようである。他方、災害対応に直接関与しながら、救援活動に従事する人々、とりわけ災害復興活動に地道に携わる NGO 関係者の視点から災害が語られることは、いまなお稀である。本稿では、災害緊急支援に長年従事してきた1人の NGO ワーカーの目から見たバングラデシュの災害を、彼自身の回想と語りによって、歴史的に跡付けてみたい¹。

I. 本研究の背景と意義

1. バングラデシュ、災害研究、オーラル・ヒストリー

バングラデシュは、農業や貧困、開発等に焦点を当てて言及される傾向にある。しかし同時に、同国は多種多様な自然災害に見舞われることでも知られている。最も有名なのは洪水被害であろう。もともと同国にあって洪水は毎年の季節的現象であるが、しばしばそれが普通の範囲を超えて大災害にまで至る²。また、サイクロンの被害も知られている。特に1991年のサイクロンは死者・行方不明者14万人とも言われる大きな被害を出した。日本から初の海外緊急援助隊派遣があったため、日本でもその被害は広く報道された³。この他、モンスーン

1 この研究は、文部科学省科学研究費基盤研究（A）「アジア・太平洋地域における自然災害への社会対応に関する民族誌的研究」（代表：林勲男）の研究成果の一部を成す。本来であれば、もっと早く研究成果をまとめる予定であったが、以下の本文に記すような事情から、調査が大幅に延びることになってしまった。代表の林氏にはご迷惑をかけたことをお詫びすると共に、その厚いご支援に感謝する。

2 バングラデシュの「洪水」と、日本などにおける洪水との差異、その形態や理解に関しては、高田[2008]で論じたので参照されたい。なお、文献リストは連載の最終回末尾にまとめて掲載する。

気候の特徴は乾季と雨季に 1 年が 2 分されることだが、その入れ替わりの時期には竜巻が発生しやすい。また、沿岸部はしばしば高潮に襲われるし、強力な河川の流域では河岸土壌浸食が発生し、毎年、数万から数十万世帯の人々が土地や家屋を失い、移動を余儀なくされる。さらには乾季に度々発生する旱魃、以上の自然災害の被害と共に（あるいは、その結果として）生じる飢饉等、広義の自然災害は枚挙に暇が無いほどである。

こうした状況を受けて、バングラデシュでは災害に関する研究も盛んである。特に 1991 年のサイクロン被害以降、災害全般に対する社会の意識が高まり、近年では災害年報も刊行されるようになって⁴。研究や研究成果の刊行母体も、政府関連の部署から、大学等の高等教育機関、国際機関、さらには NGO 等々、多様な組織が関与するようになってい

ただ不思議なことに、これまでは専ら災害の被災状況や防災計画等に関心が集まり、直接の被災者に目が向くことは稀であった。確かに、多くの新聞雑誌が被害の報道を行い、その中では被災者の声が伝えられることもあるが、あくまでも「記事」の一部であった。しかし、被災者の声以上に伝えられることがなかったのは、実際に救援活動に携わる人々の声である。それはあたかも、「救援活動」だけがあって、実際に現場で救援活動を行なう「人々」は存在しないかのようであった。しかし、言うまでも無く、救援活動は実際に行う人々がいて初めて成り立つものである。それでは、活動を行う人々は、災害の現場で何を見て、何を考えるのだろうか。本稿は、災害救援に長い間携わってきた 1 人の NGO ワーカーに災害救援活動について語ってもらい、彼の語りの中に現れる様々なエピソードから、バングラデシュの災害、災害を経験する人々（＝被災者）の生活、災害に直面した人々の対応、さらには災害救援活動の活動実態から見た NGO の姿、等々をあぶりだそうとする試みである。その意味で、本研究は、やや特殊な形であるが、災害研究であり、災害のエスノグラフィーでもある。また、災害救援活動の現場で実際に救援活動に従事する人々の目から見た災害現場の証言であり、将来の災害研究へ資料を提供するものでもある。

同時に、本稿は、NGO ワーカーの災害救援活動に焦点を当てていることから、一種の NGO 論ともなっている。近年、日本でも NGO に関する認知度は徐々に高まっているものの、特に国際 NGO（INGO）について一般の理解はまだ十分と言うには程遠い状況がある。また、バングラデシュの NGO については、特にマイクロ・クレジットを中心に引き上げられることが多くなっているものの、NGO ワーカーたちの現場での活動については、各 NGO 内部のニューズレターで簡略な報告がなされる程度で、詳細なレポートは稀である。本稿では、NGO ワーカー自身が自分の活動について（必ずしも全体的にはなくとも）詳細に語っ

3 この被害については、以下の記述の中で詳細に触れる。

4 大規模な災害が発生する度に、例えば「1987年洪水」「1991年サイクロン」等々の形で次々に研究や被害調査レポートが刊行されているが、極めて多数に上るので、あえてここには提示しない。

ている。その意味で本稿は、NGO 自体を議論の正面に据えているわけではないにしても、NGO 論として議論の材料を提供するものであると言える。

さらに、ここには一種のオーラル・ヒストリー研究の可能性を試そうとする狙いもある。社会学や人類学の分野では、これまで多様なオーラル・ヒストリー研究が試みられてきた⁵。近年ではオーラル・ヒストリーは対象とする範囲を広げ、一般の人々の日常生活から政治家の回想等まで視野に収めるようになっていく⁶。災害に関しても、被災者や災害の被害を何とか乗り越えてきた人々にまで、こうした手法を用いる例も出ていく⁷。とはいえ、ここでも救援活動に直接携わる人々の声が伝えられることは稀である。その意味で本稿は、オーラル・ヒストリー研究としても一定の意味を有するものだと考える。

なお、今回は、NGO ワーカーの語りを紹介すること、それも、できるだけ素顔の「語り」を紹介することに重きを置いた。そのため、本文中では語られた内容を理解するために最低限必要と考えられる注釈をカッコ書きで施した。それ以上の説明が必要な場合は、注記をしているので、参照されたい。ただし、十分な検討のためには、細部にわたる、より詳細な注解が不可欠であろうが、時間的な制約のために果たせなかった。いずれ、完全な形で注解を施し、考察を加えた上で提示する機会を待ちたいと思う。

2. 聞き取り：背景と状況

本稿の基になる聞き取りは2004年8月から開始した。以下の語りの主人公であるサイフル氏 (Saiful, 以下敬称略) は、筆者とは旧知の人物であったが、彼が災害救援活動に従事していることは知っていても、それが具体的にどのようなものであるのかについては、今回の聞き取りを始めるまで話題にした事がなかったため、詳しくは分からなかった⁸。そのため最初

5 オーラル・ヒストリーとは称さずとも、古くはオスカー・ルイスの研究 [1969, 1970] 等があり、それらはその後の文化批判研究の中でも一定の評価を受けている (例えば、マールクス&フィッシャー [1989] 参照)。また、日本でも中村 [1976]、中野編著 [1977, 1981-82] の先駆的研究があり、中野・桜井編 [1995] による理論的研究や谷編 [2008] のような概説書も登場している。もっとも、用語の面では「ライフ・ストーリー」、「ライフ・ヒストリー」等、必ずしも一定しているわけではない。例えば、谷編 [2008] の中では、ライフストーリー (ママ) をより広いカテゴリーと位置づけ、オーラル・ヒストリーをその一部としている。また、多くの文献では、これらの語をしばしば互換可能なものとしている。本稿では、あえてそれほど厳密な区別立てを行わず、ある程度は互換的なものとしてこれらの語を捉えることにする。この分野に関して、最近では研究も多数登場しているが、個々に言及することは控えたい。とりあえずは、近年までの世界的な流れをリードし、なおかつ最も包括的に論じたトンプソン [2002] を参照のこと。

6 一般の人々の例については、上掲の中村、中野、谷、トンプソン等の文献を参照。政治家や公人に関する議論の例としては、御厨 [2001] を参照。

7 例えば、阪神淡路大震災の被災者の語りとしては樽川編 [2007] を、インド洋大津波の被災者と生存者の語りとしては広瀬 [2007] を参照。

8 通常、この種の文章は匿名ないし仮名を使うのが一般的である。それは、もちろん個人情報保護の観点からであり、また、文章の公表により語り手に予想外の被害が生じないようにとの予防措置で

は、あくまでも NGO ワーカーの視点から災害を見ることでバングラデシュの災害について理解を深めるきっかけに出来れば良いだろう、との気楽な思いから、ごく短時間の予定でインタビューを開始した。しかし、サイフルの話が詳細に及び、一つ一つの災害に関する聞き取りが予想外に長時間に及んだこと、また、現役の NGO ワーカーであるため、彼の仕事の許容範囲で聞き取りを行わねばならなかったこと等から、当初の短期間で終了するとの見込みは修正せざるを得なくなった⁹。

聞き取りは毎回 2 時間から 3 時間以上にも及び、聞き取りを終えると聞き手（筆者）も語り手のサイフルも疲労困憊の状態になったが、これは、聞き取りの特殊な形態にも一因がある。聞き取りは基本的に筆者が直接彼からベンガル語で行い、曖昧になる部分では英語で補足するようにした。当初は聞き取った内容をその場でメモ（日本語にベンガル語と英語を混ぜた形態）し、宿に引き上げてから、その度に改めて文章化した。さらに、文章化したものを整除、疑問点の検証、前後での食い違いのチェックを行い、次の回に口頭で前回の聞き取り内容の確認を行った。このような聞き取りにはお互いに慣れていなかったため、当初は聞き間違いも多く、また語り手の記憶も曖昧だったり、記憶違いがあったりして、次の回は前回の検証だけで終わったこともある。さらに、彼と聞き手の筆者との日程調整が難しかったことなどから、初年度では聞き取りは終了しなかった。

2005 年度からは聞き取りも本格化し、ある程度の範囲を聞き取り終えたと感じていた。しかし、念のために全てを英文翻訳し、サイフルに内容のチェックをお願いすると、さらに問題が生じた¹⁰。筆者もサイフルも英語のネイティブではないためと、ベンガル語と英語の翻訳ではかなりニュアンスが異なる部分があり、その確認や修正に多大な時間が必要であることが判明したのである。その後、今度は録音を行いながら、新たに続きの聞き取りを行った。このような形で、毎年夏季に 3 回から 4 回、1 回につき 2 時間から 3 時間の集中的な聞き取りを行った。しかも、その間にも 2007 年度のサイクロン等、新たな災害が発生し、それらの活動に関する聞き取りが加わったため、聞き取り自体は 2008 年秋時点でも、なお継続中である。

もある。しかし、ここではサイフルと個人名を出すことにした。それは、語り自体にリアリティーを出すためであり、語られた内容の信憑性に一定の保障をするためでもあるが、何よりもサイフル自身がそれを望んだからである。また、バングラデシュの場合、イスラーム社会であることを反映して、同姓同名が多く見られる。そのため、サイフルと名前の一部を記しても、それで人物が特定されにくい事情も考慮した。

9 サイフルの勤務先である NGO「シャプラニール」、とりわけ、当時の現地駐在員の藤岡恵美子氏には、聞き取りに関し寛大なる措置を取っていただいた。記して感謝の意を表する。

10 多くの言語と同様、ベンガル語も口語と文語が異なる上に、ベンガル語は両者の差が大きい。したがって、残念ながら筆者の力量では聞き取った内容をベンガル語で文章化することは難しかった。また、聞き取りの成果を公表することは事前にサイフルと了解していたため、英語での文章化の方が望ましかったこともある。

以下に提示する聞き書き部分は、聞き取りを終了したうち、時系列的に早い時期の語りから始まる。一般に語りには繰り返しや省略、話の筋が飛ぶこと等が付きものである。サイフルの場合も同様であり、前後でつじつまの合わないこともあった。それらについては極力精査し、サイフルにも慎重に確認した上で、繰り返し部分は削り、省略部分は補足し、話の筋が飛んでいる部分はつなぎ直す等の調整を随所で行った。しかし、筆者の力不足もあり、なお不十分な部分もあることを、あらかじめお断りしておく¹¹。以上のような意味で、本稿はサイフルと筆者の共同作業の産物である。

翻訳について問題点を記しておく。以下の文章はベンガル語から日本語への翻訳を基に、それをベンガル語で説明してサイフルに確認し、さらに英訳した文章により再度彼に内容の確認を行い、それを基に当初の日本語の文章をチェックしなおしたものである。そのため、基本的な内容に関してはそれほど大きな過誤があるとは思えない。しかし、ベンガル語を日本語に翻訳する際には独特の難しさが伴う。例えばベンガル語の1人称には“*ami*”だけしかない。しかし、それを「私、自分、俺、あたし」と場面や登場人物によっては書き分けねばならない。また、方言や階層を感じさせる表現の翻訳はさらに難しい。また、村言葉はどうするか。例えば、“*Ami ki karba*”（アミ・キー・コルボ、私はどうしましょうか=どうすればよいのでしょうか？）も、サイフルが、登場人物の当時の発音を意識して再現し、くぐもったモタモタした発音で“*Amaga ki karma*”（アマゴ・キー・クルモ、男性なら「俺やー、どうすりゃいいんだよ？」、中年女性なら「私っちゃどうすりゃええんだい？」のようなニュアンスの表現）と言う場合がある。さらに、ベンガル語と英語では明らかに意味内容が異なる部分もある。それらをどのように反映するのか、かなり悩んだ。結局、その時々筆者が得た感触から比較的ニュアンスに近い表現をすることや、可能な範囲で男女年齢別階層別等には関わらないニュートラルな表現を採用することにより、出来る限り元の語りを再現するように試みたが、それが果たしてどこまで成功しているか、実のところ心もとない。以下の文章には、そのような制約があることをお含みいただきたい。

11 一般に記憶に関しては、時間が経つほど曖昧かつ簡略になり、同時に様々な歪みが生じる傾向が指摘されている。サイフルの場合も同様であり、初期の災害救援活動については比較的簡単な印象を述べるに留まっている。同様にまた、事件や出来事が大規模、もしくは小規模であっても当人にとって衝撃的な場合には、その記憶が鮮明かつ詳細になる傾向についての指摘があるが、この場合も同様である。したがって、以下の記述の粗密は、必ずしも災害の規模の大小や災害救援活動の規模・期間を反映するものではない。

II. 語り手、サイフルについて

1. NGO に入るまでの彼の生い立ち—サイフルの語りによる—

初めに、サイフルの生い立ちから彼が災害救援活動に携わるようになるまでを紹介しよう。彼は、1960年にバングラデシュ西部、旧ラッシャヒ（Rajshahi）県の一部、現在のナオガオン（Naogaon）県で生まれた¹²。この部分についても彼から直接聞き取りを行ったので、以下は彼自身が1人称で語った言葉を再現する形で提示する。

「(私が) 生まれたのは母の実家でだ。バングラデシュでは娘の出産の際に、しばしば母親（=新生児の母方祖母）が世話をしに来る。都市部だったので、実際に生まれたのは病院でだが。というのも、母方の祖父が非常に高度な教育を受けていた。（だから、当時では珍しい病院での出産だった）。

私の実の兄弟は（自分を含め）4人だが、実母が亡くなったので、その後、父は再婚した。そこに（父と継母との間に出来た腹違いの兄弟が）弟2人、妹1人いる。実の兄弟のうち、一番下の弟1人は交通事故で死んだ。マスターズ（修士課程、ただし学制が異なるので、実際には日本の学士後期課程＝15年目と16年目相当）在籍中だった。だから残っているのは3人だ。私の次の弟は、アシュゴンジ（Ashuganj）発電所（＝同国の代表的な発電所）の機械技術者で、ロシア人とともに仕事をしている。その次（の弟）も大きな製造会社で仕事をしている。彼も技術者だ。そう、自分は長男だよ。（腹違いの）兄弟の長男は、今回、inter-mediate（＝14年終了時）の試験を受けた。どうしたわけか、試験の出来は一科目良くなかったようだが。その弟、一番下の弟だが、父は彼をマドラサ（＝イスラームの宗教学校）に入学させた。（自分も含めて）皆が同じ路線（＝一般の勉学コース）で勉強をしているが、それでは困る、ムスリムだから¹³。

父は inter-mediate を受けた（その当時では珍しくかなりの高等教育を受けた人、ということ）。父は勤め人だった。バングラデシュ水開発局（*Bangladesh Pani Unnayan Board*= *Bangladesh Water Development Board*, 以下 BWDB）で勤めていたんだ。（父の実家の）ムラの名前

12 以下、固有名詞等については、初出時のみローマ字表記を示し、それ以後はカタカナ表記にする。ローマ字のイタリック体は基本的にベンガル語のローマ字転写を表している。また、カタカナ表記は基本的には現地の発音に近いものとするが、それとは異なる表記が一般的に通用している場合（例えば、地名の Cumilla は、現地の発音に近く言えばクミッラだが、一般的にはコミラとして記述される）、そちらを優先することにしたい。

13 息子の中の1人ぐらゐは宗教を勉強する方向に進んで欲しいと、父が考えたからだ、ということを用意している。バングラデシュの村部や地方都市部では、ムスリムたちの間で今でも男児のうちの少なくとも1人をマドラサで勉強させる例が多々見られる。そうすることにより、その両親のイスラームに対する敬虔さを具体的に表明し、それがアッラーに対する信仰の証しになる、（人によっては、そうすることにより死後、天国に迎えられる）と考える傾向が今なお根強いためである。

はN。シャージャハンプル (Shahjahanpur) 郡だ。ただし、市町村の分割統合で非常に変化が多かった。ムラは、(北西部の都市) ボグラ (Bogra) の町のすぐ近く、医科大学の側だよ。ほとんど市域内と言ってもいいくらいだ。でも、そのムラではあまり暮らしたことがない。というのも、父が勤めをしていた (からだ)。その転勤の都合で、ボグラのシャリアカンディ (Shariakandi) にはしばらく住んだことがあるが。それ以外は、いつも (BWDB の支所がある) 大きな都市に住んでいた。つまり、シラジゴンジ (Shirajganj)、ロングプール (Rangpur)、それからボグラ (市内) などだよ。

高校 (= 6年から10年) は、(同じ北西部だが、ボグラよりさらに北部の都市) ロングプール (で終えた)。カレッジ (11年と12年、場合によっては14年まで) もロングプールだった。そのカレッジは非常に有名なカレッジだった。東西ベンガルが1つだった頃 (= 旧英領期、1947年の印パ分離以前)、そのカレッジはカルカタ大学の下で非常に尊敬されていた。名前は Carmichael Collage。(だが) カレッジは卒業していない¹⁴。カレッジで HSC¹⁵ に合格してから、当時は非常に野心的だったので、よし、機械工学を学ぼう、と考えた。機械関連の科目の成績が良かったからだ。ところが、ちょうど (運悪く) チフスにかかってしまい、それは果たせなかった。当時、従兄弟などがいて色々と話をしたが、1人の母方のオジが「統計学を勉強しろ」とアドバイスをしてくれた。そこで、(首都のダッカにある同国で最も名声ある) ダッカ (Dhaka) 大学を受け、合格した。さらに (南東部の港湾都市チッタゴン [Chittagong] にある) チッタゴン大学にも合格した¹⁶。当時、ラッシャヒ大学では (学内の学生組織間の) 暴力的闘争が激しかった。それでダッカ大学等に向かったのだ。

チッタゴン大学に入ったのは、チッタゴンには山 (日本的に言えば、なだらかな丘陵) があり、樹木が生い茂り、景色が非常に良く、それが大変に気に入っていたからだ。自分の親しい友人がやはりダッカ大学に合格していたが、彼をそそのかして、2人でチッタゴン大学に入学した。彼に、「ダッカには自分たちの親しい友人も沢山いるが、チッタゴンに行けば (新しい) 友人も増えるだろう、(新しい) 関係も増えるだろう」(と言って説得した)。実際、(チッタゴンの) 山や海は非常に良かった。チッタゴンには4・5年いた。在学中は学内の Shah Amanat Hall (チッタゴンの有名なイスラーム聖者にちなんだ名の寄宿学生寮) に住んでいた。そこで統計学を勉強していたのだが、特に人口学 (demography) を中心に勉強した。ところが、卒業論文の際、サー (= 指導教授) は私に農業統計 (の研究) をさせた。という

14 卒業までいれば14年終了だが、バングラデシュでは、さらに高等教育を受けようとする場合には12年生を終えて HSC (= Higher Secondary Certificate, 上級高等学校卒業認定試験=12年生課程卒業認定試験) に好成績を取めたら、途中で別の学校 (基本的には大学) に進学するのが普通。

15 前注参照。

16 ボグラ県やロングプール県等のバングラデシュ北西部は行政区分上ラッシャヒ管区の一部であり、同管区の学生たちはラッシャヒ大学に行くのが普通だが、そうしなかった事情を語っている。

のも、人口学を専門とする教授がいなかったからだ。(当時は)教員に欠員が多かった。だから、サーは「お前はこれをやれ。誰が指導するのだ?」と(言った)。それで、農業統計について卒論をまとめた。サーは自分のことを気に入ってくれて、「お前は(大学院に)進学しろ、私が指導してやる」と言ってくれていた。サーは、すでに亡くなっているが。しかし、自分はその言葉に従わなかった。それが今でも非常に残念だ。修士課程で開発研究でも勉強していれば…。(結局)サーの言葉を聞かず、修士課程に入らないで、民間に就職した。1985年だった。」

2. NGO 業界に入る—サイフルの語りで—

「最初に勤め始めたのは(アメリカの)フォード基金の資金で活動する、ある団体だった。フォード基金そのものじゃない。もっぱら家族計画の調査を行う団体だった。そこで仕事をしてから、(それからどうしようか)考えて、自分で努力をして、1987年に BRAC の調査(部門)に入った¹⁷。非常に大きな部門だ。そこで調査を続けるうちに、そう、当時、NGO の間では(優秀な人材をめぐって)ヘッド・ハンティングが盛んだった。そこで、ある(NGO の)大物とつながりができた。その彼が、「お前を CARE (アメリカの有力 NGO) に入れてやる」と言った。なぜかそれは実現しなかったのだが。しかし、(困ったことに)すでに私は BRAC を辞めてしまっていた、彼の言葉で(=彼の言葉を信じて)。それで、今度は NORAD のプロジェクトに加わることになった¹⁸。調査プロジェクトのアシスタントとして。“Country Boat Pilot Project”(=伝来の小型船に関する調査プロジェクト)だよ。(地方の小型船舶に関しては)当時ようやく機械化が始まったばかりだった¹⁹。

NORAD のプロジェクトで仕事をしているうちに、イギリスの“Save the Children”に移った²⁰。1990年のことだ。ここではかなり長期間働いた。そして、(NGO の活動に関連する自分)独自の学習環境と基盤はそこで作り上げられた。色々な仕事をしたよ。それに、そこ(Save the Children)は自由市場のようなもので、開かれていた。関心があり、経験があつて、仕事が出来て、そして結果を出せば、組織内で昇進できる。人材開発(human resource development)の面で非常に見通しは高く持つことができたんだ。

17 BRAC = Bangladesh Rural Advance Commission, バングラデシュで最大の NGO であり、今では世界有数の NGO でもある。

18 NORAD = The Norwegian Agency for Development Cooperation, ノルウェーの開発援助機関。

19 だから、早急に在来船の様子を調査する必要があるということ。この仕事はプロジェクト・ベースなので、プロジェクト期間だけの採用であり、サイフルにとっては、あくまでも次の安定した仕事へ移るまでの一時しのぎ的なものであったようだ。ちなみに、この在来船調査はかなり大規模に行われており、そのうち比較的初期の部分だけは JANSEN et.al. [1989] として公刊されている。

20 Save the Children はイギリスを代表する NGO。世界各地で活動を展開している。サイフルが仕事を果たしたのは、同 NGO のバングラデシュ事務所。

ただ、何人かの私の知り合いの先生たちは、私に常に言っていた。政府の仕事に就くように、と。しかし、私は最初から、ほんとうに小さい頃から、1人でムスリムの祈りを捧げていた。“Holiness high place Allah, give me some job, that I can help the people”（至高のアッラー、我に人々を助ける仕事を与えたまえ）、こんな風にだよ。今はこう思うんだ。それが恐らくは私をここに（＝今に続く一連の NGO での仕事に）連れてきたのだとね²¹。

（でも）今は考え事も多いよ。引退したらどうやって食べよう、どこに行こう、と。ともかく機会がないからね。NGO で仕事をしているから²²。もちろん、これは私一人の問題ではない。どの NGO でも同じようなものだが。とはいえ、（小さい頃からの願いがかなっているから）幸せだよ。まだ47歳だし、時間はある。生きていればだがね、inSh-Allah（アッラーの思し召しのままに）。」

3. Save the Children から2007年まで—サイフルの語りによる—

ここでは、Save the Children での活動をはじめとして、その後の活動について簡単に彼の話を聞くことにしたい。徐々に災害救援活動に携わるようになるが、彼も通常は NGO の日常業務を行っている。彼の日常業務を見ることで、それと災害救援活動とがどのような関わり方をしているか、相互にどのような影響を及ぼしているかが明らかになるであろう。再び彼の語りに戻る。

「Save the Children ではチョール（*Chor*、川の中州や河岸の、砂が堆積してできた土地）地域で普段は開発活動をしていた²³。主な活動地域と内容は、年次順に言うとな次のようになる。

-
- 21 この言葉からも、また父が兄弟の1人をマドラサで学ばせたことから分かるように、彼の生家も、また彼自身も非常に敬虔なムスリムである。バングラデシュはイスラームが国教であるが、一般的に言って欧米や日本のような非イスラーム国系が母体の NGO で働く人は、ムスリムであっても「リベラル」なタイプが多く、彼のような例は比較的稀である。
- 22 NGO 業界は、政府関連の仕事と違って年金もなく、労働者として先行きに関しては不安も多い。バングラデシュでは政府関係の定年が57歳と若く設定されており、民間も大部分がそれに準じている。この定年設定では、晩婚や子沢山の場合、まだ子供が学齢期にあるうちに定年を迎える場合も多く、そうした人々は一層悩むことになる。また、バングラデシュでは政府関係、特に比較的上級の公務員には、しばしば天下り先が用意される。同国では法律や規則よりも人間関係で様々な事柄の成否が決まる傾向が顕著であるため、官僚 OB のコネをあてにして天下りを受け入れる例は日本等に比べても多い。受け入れ先には外国の援助機関や NGO も多く見られる。逆に、一般の NGO 職員にはその種の機会は限られている。バングラデシュで NGO が多数生まれる背景には、NGO 業界で経験を積んだベテラン職員が、自分の将来を考えて独自に NGO を立ち上げる例が多いことも影響している。独立 NGO の創始者になれば、定年やその後について頭を悩ますこともないからである。
- 23 チョールについて説明を加えおく。バングラデシュの河川は非常に規模が大きく、特にジョムナ（インド側ではブラフマプトラ）、ポッダ（同、ガンジス）、メグナの3大河川の規模は桁違いに大きい。その流域面積はアマゾン川に次いで世界第2の規模であり、バングラデシュという国自体がこれらの河口デルタ地帯に位置する。特にジョムナとポッダの合流点から下流は川幅が広がり、雨季には川幅が20km ないしそれ以上になる。また、ジョムナ河の場合、バングラデシュ国内ではインドとの国境部まで1000トン級の船舶が乾季でさえ往来できるほどの流量がある。さらに、流れも強力で

最初が（中北部の）ジャマルプール（Jamalpur）で約 6 万戸を対象にした Community Base Impact Survey で、貧しい人の洪水に対する対処法（Coping mechanism）などを主に調査した。ここで一定の成果を挙げたので、転勤になった。次は（中部の）シャリヤトプール（Shariatpur）での約 4.7 万戸を対象にした活動で、現地事務所全体の監督が仕事だった。同時に、チョール地区のユニオン健康福祉事務所（Union Health and Family Welfare Center）の調査結果を受けて、チョール地区での対応モデルを考えたりするのも仕事だった²⁴。例えば、手押しポンプのパイプを伸ばし、普通よりも高い位置に設置することで、洪水の際にもポンプが水に浸からないようにするとか、学校の夏休みに代えて洪水休暇（Flood Vacation）を設定する、等のアイデアを導入した。その次に移ったのが（北部の）クリグラム（Kurigram）で対象は約 3 万戸だった。ここでは、これまでの「対処法」をさらに展開した。例えば、（洪水に対して）食糧の事前備蓄を行う、（洪水の水に漬かりにくくなるよう）家の土盛りをかさ上げする、モスジッド（イスラームの礼拝所）のマイクを通じて（洪水発生時には）幼児死亡率が上がるのでそれに注意するよう放送する、等々だよ。同時に、北西部のシラジゴンジ、中部のマニクゴンジ（Manikganj）、東部のチャンドプール（Chandpur）等、各地のチョールを回り、チョールのモデル化を試みるレポートを提出した。このレポートは Save the Children の「国別戦略報告書（Country Strategic Paper）1998-2003」に少々反映されている。ただ、現在は責任者が変わり、それと共に方針転換したので、生かされていないね。

また、これら平時の活動と並行して、時に緊急援助も行った。1991年のサイクロン、1992年のロヒンガ（Rohingya）難民、1994年の竜巻、1995年洪水、1998年洪水、等々だよ²⁵。1996年からはパートナーシップ担当になり²⁶、小規模 NGO を相手にプロポーザル（＝様々なプ

ある。それゆえ、一方では毎年数万から10万世帯以上が耕地から家屋敷までを失うような大規模な土壌流失が各地で生じ、その裏返しとして他方では、あちこちで広大な堆積地が発生する。チョールと呼ばれるこれらの堆積地は、しばしば複数の集落と耕作地を形成するほどの大規模なものである。日本で言えば、新しい村が複数、突然目の前に出現するような規模である。しかし、それらのチョールは突然出現したものであるがゆえに、インフラも何もなく、全てを一から始めなければならない過酷な土地である。新しい利権の出現をめぐる有力者同士の争いも多く、また、所有権をめぐる入植者間の土地争いや、入植者に対してラティヤール（有力者が雇う暴力組織で、ラティ＝「こん棒」を持つことからこの名がある）の引き起こす暴力事件が発生する危険な土地でもある。チョールは、年を経るにつれて規模拡大し、同時に安定して、最後には一般の土地と同様になるが、それまでの移行期間が、短い場合でも10年から20年以上、長い場合には数十年かかる。その間ずっと、生態系としても社会的にも不安定な状態が続くのである。もちろん、安定する前に河川流路が変化して、再び消失するチョールも多い。以上のような特殊な状況ゆえに、チョールは一般の行政サービスから取り残される傾向にあり、その穴を埋めているのがここで言及されているような NGO の活動なのである。

24 ユニオンは、郡の下の行政単位で、一種の行政村。

25 これらの活動については、以下で順次個別に詳しく見てゆく。

26 パートナーシップは、ごく大まかに言えば、海外に本拠を持つ大規模な NGO と、地元の小規模な NGO がパートナーとして契約関係を立ち、前者は基本的にドナーとなり、資金提供とプロジェクト実施後の評価等を担当し、後者はプロジェクトの計画立案から実行までを行うように、分業化す

プロジェクトの実施提案書)のチェックと評価等、評価する側での経験を積んだ。

1999年後半、パートナーシップの相手(=評価される側)の立場を知りたくて、(自分が)以前から(活動)経験のあるクリグラムで CARE のパートナーとして活動している“Solidarity”という小さい NGO に入り、半年間、パートナーシップのための調査・計画立案を担当した。また洪水に対処するパイロット・プロジェクト、例えば建物の基盤底上げ等も担当した。同時に、PLA (Participatory Learning and Action) の手法で屋敷地開発を行った。例えば屋敷地内での野菜栽培、焚き物準備等だ。その他に、道路やハット(定期市、毎週決まった曜日に開催される)の展開も交渉した。ちなみに、こうしたパートナーシップの両方の側での経験を基にパートナーシップについての原稿をまとめ、S さん(この後で勤めることになる NGO の元日本人駐在員)の後押しで“Working Through Partnership”という小冊子として 2003年に出版したんだ。

2000年、シャプラニール(Shapraneeer、東京に本部がある日本の NGO)に入った。現在は、パプリ(Papli、シャプラニールの地域部門が独立した地方 NGO で、シャプラニールのパートナーの一つ)、ストリート・チルドレン問題、ヒ素被害問題等を担当している。2005年からは、これに都市開発部門の一部として「家事手伝い」の少年・少女たちの研究・対応が加わった。」

以上が2007年までのサイフルの NGO 業界における主な経歴である。これを見ただけでも、彼が、いくつもの NGO を遍歴しつつ豊富な現場経験を身につけた、ベテランの NGO ワーカーであることが明らかであろう。

Ⅲ. 災害救援の体験

以下では、主に災害の救援活動に限定して、詳しく活動内容を記すことにする。これ以後は、基本的に全てサイフルの語りであり、特別に記さない限り、一人称の「私」ないし「自分」とは全てサイフルのことである。

1. 1987年の大洪水

1987年、私は BRAC でプログラム・オーガナイザーとして活動を始めたばかりで、(西部の)ラッシャヒ県で6ヶ月間働いた後、(同じ西部の)パプナ(Pabna)県に移動になった。当時、私の主要な仕事は、家庭での下痢対処法と免疫化(=下痢疾患予防)のための拡大プログラムで、人々を啓発することだった。政府の保険センターや行政村議会(Union Parisad)

／ るもの。建前上両者の関係はパートナーとして対等とされるが、実際にはかなり非対称な関係である。

と連携しつつ、(1 グループ) 7 人から10人の人たちを対象に活動を行っていた。

そうしたある日、突然にジョムナ (Jamuna) 河が溢れ出し、その支流で地域的な洪水が発生した。(その場所は) 当時の私の活動地域で、多数の村や道路が水没した。私の活動の中心が母子保健だったので、活動の一環として洪水に対し対処措置をとることにした。何よりも初めに、飲用と料理用には清潔な手押しポンプの水を使うようにと広報した。私たちはまた、必要に応じて水を浄化するためのカリ明礬を配布し、(人々に対して) もっと必要な場合には購入するように言った²⁷。さらに、下痢疾患防止のためと、仮に発生してしまった場合の対処法について、村ごとのセミナーを開催した。これらの活動期間は、洪水発生直後から洪水後まで合計約 1 ヶ月程度だった。

この洪水に関連しては二つの事柄が強く記憶に残っている。一つは、堤防の切り崩し事件に関するものだ。洪水の直前、BWDB はその地域に堤防を造り、そこに水位を調節するための水門 (Sluice Gate) を設置したばかりだった。(堤防設置の結果) 洪水の初期段階には、堤防の内側では洪水被害が全くなかった。逆に、堤防の外側になった地域では以前にも増して水位が非常に高まり、洪水の被害はかつてないほど大きくなった。(堤防の) 外側地域の住民たちは激しく怒り、(堤防の内外で) 水位を平準化するために堤防を切り崩し、同時に (排水しやすくなるよう) 水の流れを確保することを要求した。他方、(堤防) 内部の住民たちは、そうした要求に強く反対した。その結果、(両者は対立し、相手の行動を阻止しようとして) 両者はそれぞれ (片方は堤防を切り崩す機会を狙い、他方は切り崩されないようにするため) 堤防の監視パトロールを始めた。BWDB も他の関係当局もこの件に関して一切対処しなかったため、ある日、堤防の外側の住民たちは堤防のごく一部を切り崩した。水の圧力が強かったもので、このわずかな切れ目はたちまち大きな決壊になった。この状況を見て、堤防の内側の住民たちが現場に駆けつけ、(一時) 両者の間で激しい争いになった。(しかし、もはやどうしようもなく) しばらくして内側の住民たちは (せめて) 家財を救おうと家に帰って行ったのだ²⁸。

この経験をきっかけにして、私は堤防のような構造物で洪水を防止しようとする方式を批

27 カリ明礬 (potassium alum) は、いわゆるミョウバンで、現地では *futkiri* と呼ばれる。カリ明礬を汚濁水に投入すると、浮遊物が沈殿する。そのため、簡単な水浄化方式として現地では知られている。ただし、あくまで汚濁を取り除くだけなので、感染防止に役立つとは限らない。

28 この種の事件は、堤防設置者の側 (地域政府ないし中央政府機関) や、それを後押しする開発機関の刊行する文献に、しばしば “Public Cut” (民衆による [土手や道路の] 切り崩し) として登場する。その際、この種の行動を極めて否定的に捉え、一方的に非難する論調である点では、ほぼ一致している。しかし、それはあくまで「開発する側」からの一方的な語りに過ぎない。「される側」からすれば全く異なる語りがありうるのである。この堤防設置とその後の切り崩し「事件」の例で言えば、サイフルの語りから明らかな通り、計画策定から設置までの段階で、設置者の側に堤防設置の影響や間接的に地域社会全体に及ぼす波及効果に関する配慮がないに等しく、それが結果的に一部の人々を追い詰め、この種の行動を取らざるを得ない方向に追い込んでいる側面があることを認めねばならない。こうした事情を考慮せず、単にそれらの人々を非難しても、何ら問題解決の糸口は見えないであろう。

判的に考えるようになった。果たしてそれ（そうした方式）が全ての人にとって良いことなのかどうか、また、私たちのようなデルタ地域に住む人間にとって堤防を築くのが賢いことなのか、そんな疑問が湧いてきたのだった。

もう一つの記憶すべき出来事は、船の事故だった。私は当時、事務所と村々との間を、もう1人の村で活動する女性フィールド・スタッフと共に、（船頭が櫓で漕ぐタイプの）手漕ぎ船で通っていた。あるとき突然、大型の動力船が動き出したのだが、その船は私たちの乗った小船を見落としていた。その結果、動力船は私たちの船に衝突し、私は水の中に投げ出された。（ところが）私は全く泳げなかったの、ほとんど溺れかかった。非常に幸運なことに、同乗者の1人が、彼は軍人だったが、瞬間的に私の髪の毛を掴んで船に引き上げてくれた。こうして、ギリギリのところで私は難を逃れたのだった。

2. 1988年の大洪水

パプナの活動で良好な結果を出したので、1988年にマニクゴンジ県ギオール（Gior）郡へ転勤になった。ここで BRAC は初歩的なヘルスケア（Primary Health Care）のモデル（プロジェクト）を展開していた。私はプロジェクトチームのチーフに指名された（つまり、昇格）。さっそく私は現地に移動し、そのヘルスケア・モデルを広めようと努力を始めた。私たちは一軒の家を借り受け、そこで寝泊りも事務作業も行った。家はベラ（裂いた竹で編んだもの）の壁にトタン屋根葺きで、床は土間だった。スタッフは男女を合わせて11人だった。

ある夜、いつものように寝ていたのだが、（何かの拍子に）ベッドの端から手が垂れたら、その指先に水が触れるのを感じた。瞬時に飛び起きてみると、驚いたことに洪水の水が私の部屋に入り込んでいた。水かさは急激に増していった。そこで私はテーブルの上に座りこみ、朝が来るのを待った。それから、私たちはチームの事務所を離れ、（近隣にある）地区事務所に移動した。地区事務所はコンクリートでできた（2階建ての）建物で、私たちは2階に居を定めた。1階は事務所とし、屋上を台所として利用した。

（しかし）その後も水は増え続け、その日のうちに1階は完全に水没してしまった。大急ぎで私たちは人々にキャンペーンを開始した。（キャンペーンは）主に公衆衛生に関するものだった。またキャンペーンと並行して、チラ（一種の干し飯）²⁹ や手作りのルティ（無発酵の薄焼きパン）³⁰ を、洪水被災者の中でも特に困窮した人々に緊急支援物資として配布した。他方で、私たちはリクシャ（三輪自転車型の人力車）にスピーカーを積んで、担当地域を回りながら、家に留まっている人々に対し、飲料水には安全な水を使うよう啓発を続けた。

29 一度加熱した後、臼などで突いて薄く延ばし、乾燥させた米で、そのまま食べられる

30 ルティは、小麦粉を練って焼いたものの総称であり、いわゆるパンなども含む多様な形態がある。ただし、ここではインドのチャパティとほぼ同様の種類を指している。

この際に私たちは、人々が全ての牝牛を水に浸からない橋の上に連れて行き、ダカット (dacoit, 一種の武装強盗団)³¹ に襲われないように交代でパトロールを行う姿を見かけた。牝牛は農民たちにとって非常に貴重な財産なのだ³²。

政府と NGO の調整会議 (が開かれ、そこで) の決定に従い、ギオール (郡) の中央地区に位置するいくつかの学校やマドラサをシェルターと定めた。(そしてそれはすぐに実行された)。村人たちはシェルターに集まってきて、しかもそれは非常に急激なものであった。そのため、私たちはこれらの人々に非常に基本的な治療を提供し、なおかつ下痢を予防するように彼らを啓発した。というのも、こうした (人が密集した) 場所と環境は下痢 (疾患) が発生した場合には極めて危険であったからだ。(また) それらの場所で私たちは、母子保健活動の一環として、幼児とその母親に限定してキチュリ (レンズ豆と野菜の入った雑炊)³³ を調理し、提供した。私は栄養のバランスを考えてキチュリの中にプイ・シャーク (つる紫) を入れるよう注意を払った³⁴。(さらに) 私たちはこのキチュリの炊き出しを村レベルにも拡

- 31 ダカットは、バングラデシュでは村部・都市部を問わず多く見られる。同国では、1971年の独立戦争の際の武器が民間にまだ多数残っていることに加え、周辺の丘陵地域 (ビルマ [ミャンマー] からバングラデシュを経てインドの東部諸州につながる一連の地域) で分離独立闘争を続けるゲリラ組織が多数あること、国内外にイスラーム原理主義組織の地下武装組織があること、東南アジアのいわゆるゴールデン・トライアングルから近く、麻薬密輸組織があること等々の様々な要因が重なり、小火器を中心に武器が多く出回っている。そのため、ダカットもナイフや藪切り刀程度ではなく、しばしばピストルからカラシニコフや手榴弾等までの武器で装備しており、極めて危険である。
- 32 この行動については補足説明が必要であろう。バングラデシュの農村は一面がほぼ平らであり、一度水が溢れ始めると、どこもかしこも一様に水没する。しかし、用水路や小さな川にかけられた橋 (主にレンガを重ねてコンクリートで固めたもの) は、下を小船が通れるように、橋上の路面を周辺の道路面から大体 2 メートル程度 (場合によってはそれ以上も) 高く設定するのが普通である。そのため、橋の上は洪水の場合でも水没から免れる可能性が高い。他方、牝牛は水を嫌う性質を持っていて、水に浸かったままだと病死したり水死したりする。そのため、農家にとって最も貴重な財産である牝牛を何とか救おうと、農民たちがこのような行動を取ったのであろう。また、牝牛を橋上で飼い、(水没した草や水に浸かってダメになった稲等の) 餌を探して食べさせておけば、洪水中であっても乳を得ることが可能になり、それを売って細々とでも現金収入を得ることができるし、栄養の不足を補うことも可能になる。牝牛が妊娠している場合には、生まれて来る子牛を無事出産させることができ、新たな財産を確保することができる。そのような意味で、農民たちの行動は極めて合理的である。他面で牝牛は、牛市などで簡単に多額の現金と交換できる意味で、まさに動産である。そのため、牝牛が一箇所に固まることになれば、ちょうど火事場強盗があるのと同様で、ダカットに狙われやすくなる。事実、その種の襲撃は毎年のように各地で発生している。農民たちはその襲撃の可能性を考えて交代でパトロールを行っていたのであろう。サイフルの観察は、農民たちが行う災害対応行動の具体的な例を証言しているのである。
- 33 キチュリは必ずしも雑炊とは限らず、中には炊き込みご飯や、非常に豪華な肉入りのピラフに近いものもある。しかし、こうした災害時の炊き出しの場合、乳離れがしたばかりの幼児でも食べやすいこと、調理も単純であること、料理のかさが増やせること等の理由から、雑炊状のものが基本である。
- 34 つる紫は、バングラデシュでは雨季に一般的に栽培される、ビタミンが豊富なことで知られる緑黄色野菜である。つるが屋根の上に這い上がるため、洪水の最中でもその先の方を切り取って野菜として食べることは支障がなく、しかも、水に浸かっているにもかかわらず比較的早く繁茂するため、洪水時には非常に都合の良い作物でもある。

大して実施したが、その場合も対象は幼児と乳児を持つ母親とだけに限定した。

水が引いた後には、洪水後の下痢疾患の爆発的な発生を防止するため、清潔な飲料水の確保を目的として、すみやかに手押しポンプの洗浄を実施した。3日間で私が担当していた地域にある全てのポンプ洗浄を終えたのだった。

この救援活動の最中、私はギリギリのところでダカットによる襲撃を免れた。村々でチラとルティを配布し終え、事務所に向かう途中のことだった。突然、ダカットの船が間近に現れ、私たちに船をこぎ寄せて接舷するよう要求した。彼らのボートはエンジンつきのものだった（から、逃げるのは無理だった）。そこで、私は船頭にホテアオイが密生している方向に船を向けるように言った。そうすれば、動力船では（プロペラにホテアオイが絡まって）動きにくくなると考えたからだ³⁵。さらに、このまま船室（竹編みのかまぼこ型に作られた簡単なもの）の中に隠れていれば間違いなくダカットに襲われると考えたので、とにかく自分の命と同乗者の命を救いたい一心から、勇気を奮い立たせて船の舳先に立ち、こう叫んだ。「この船は BRAC のもので、（洪水被害の）支援物資を配布し終えて事務所に帰るところだ」（だから、襲っても何も取るものはないぞ）、と。とにかく逃げたいだけだった。ダカットが向けたサーチライトの光が自分に当てられ、私の言ったことが本当かどうか探るようにしていたが、それから（その男は）仲間に、「違う、この船は（狙っている獲物とは）違う」と叫んだ。ダカットの船は舳先の向きを変え、立ち去っていった。（これを見て）乗船していた誰もが「サイフル・バイは凄い！」「なんて勇敢なんだ」等と私のことを褒め称えた³⁶。しかし、本当のところ、何とか（ダカットから）逃げたくて必死だったただけだ。私はそれほど勇敢な男じゃないが、ただし、BRAC の船だと言えば、彼らは私たちに襲わないだろうとは信じていた。付け加えると、「違う、この船は（狙っている獲物とは）違う」とダカットが叫ぶ言葉を聴き、なおかつ、その日にギオール（郡の中心）で牝牛の定期市が開かれることを思い出して、私はダカットの狙いが、牛の売却代金を懐にした商人の乗った船だと気がついた。ダカットはそうした金で溢れかえった船と私たちの船を取り違えたのだ。とにかくするうちに、すでに夕闇が濃くなり、私たちは帰り道を見失った。そこで、（近くの岸辺にいる）村人たちに道を聞き聞き、やっとのことで事務所に帰ったのだが、帰り着いたのはすでに夜の11時頃だった。

（続く）

35 バングラデシュのホテアオイは、日本のものとは異なり、極めて大型である。しばしばその高さは水面から7・80 cm、時には1 m 以上にもなる。また、それに対応して根も長くて硬く、密集している場所では実際に船の動きが鈍くならざるを得ない。

36 バイ（*bhai*）とはベンガル語で「兄弟」のことで、バングラデシュでは親しい人にしばしばこのバイを付けて呼びかける。英語で、「ヘイ、ブラザー」や「ブラザー・トム」などと呼びかけるのとはほぼ同じ感覚。

Summary

Disasters in Bangladesh observed by an NGO worker: Narrative of Saiful (Part 1)

TAKADA Mineo

This essay is a self-narrative of an NGO worker who has worked for emergency relief activities in the occasions of many disasters in Bangladesh.

1. Aims of this essay

Bangladesh is famous for its disaster prone environment and there are many types of natural disaster happening in Bangladesh, i.e. flood, cyclone, tornado, drought etc. Following this, there are so many studies related to disasters, but, curious enough, there is almost no study which focuses on the narratives of disaster relief workers. This study focuses on the self-narratives of an NGO worker who has been working for emergency relief works for long. In this sense, this is a kind of disaster study as well as a case study of oral history. At the same time, in the sense of the narrative on the disaster relief activities conducted by NGOs, this study has an aspect of NGO studies as well.

The interview for this study has started in 2004 and has been continuing even now. This is a summary report for the more detailed one planning to publish in the near future. The interview conducted by the author himself in Bangla language (Bengali) and we, the author and the NGO worker whose name is Saiful, has discussed on the details of his narrative for several times. In this sense, this is a collaborative work of us two.

2. On the narrator, Saiful

In this section, the self-narrative of Saiful on his life history from his birth to the present days has shown. He was born in Rajshahi division, North-west Bangladesh. He has grown up in this region till his collage days, then had moved to Chittagong, South-east of Bangladesh for the purpose to study in the university. After graduation in 1985, he had entered to the NGO circles and experienced works for several NGOs, including BRAC, “Save the Children, Bangladesh”, etc. He is now working for Shaplaneer, a Japanese NGO. He has experiences of

works in the *Chor* regions, sedimentation of sand and silt in the big rivers as well as in the river banks. He also has experience in the fields of mother-child health care program, of health advocacy, of primary health care, of street children problems etc.

3. On the Relief Works

In this section, self-narrative of Saiful on the emergency relief works in the cases of big disasters has shown. At first, the relief activity in the cases of deluge in 1987 and of deluge in 1988 has told. He told many difficulties related to the relief activities and gave evidences on the behaviors of the farmers in the time of disasters. He also told some dangerous experiences he faced.

(To be continued)